

令和6年度 新発田市遺跡出土品展

新発田城の瓦 — 出土品と復元瓦 —

令和7年2月21日（金）～3月26日（水） / イクネスしばた 展示室

主催：新発田市教育委員会

開催にあたって

新発田市教育委員会では、陸上自衛隊新発田駐屯地や新発田城址公園の整備、平成14年から平成16年に行われた三階櫓・辰巳櫓の復元工事などに関連して、新発田城跡で発掘調査を行ってきました。これまでに30か所以上で実施し、その結果、かつての新発田城の姿が徐々に明らかとなってきています。

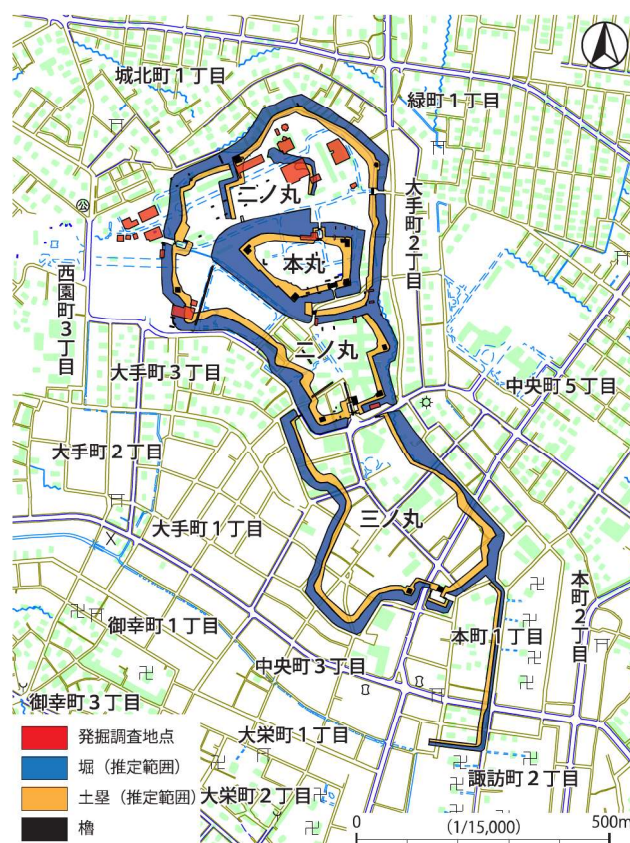
今回の展示では、発掘調査により数多く出土している瓦について紹介します。併せて、三階櫓・辰巳櫓の復元の際に使用した復元瓦も展示します。出土した瓦および復元瓦をとおして、新発田城の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

新発田城について

新発田城は新発田市街地のほぼ中央に位置します。
初代藩主・溝口秀勝^{みぞぐちひでかつ}の慶長3（1598）年の入封により築城を開始し、承応3（1654）年の3代藩主・宣直^{のぶなお}の頃に完成したと考えられます。その後、大火事や大雨などにより度重なる被害を受けますが、その都度再建・補修が行われたことが絵図や古文書からうかがえます。

明治維新後の廃藩置県を経て廃城となり、陸軍省の所管となります。多くの門や櫓は解体され、堀の一部も埋められました。

現在、新発田城に残る江戸時代の建物は、本丸表門と旧二の丸隅櫓（本丸の鉄炮櫓の位置に移築）の2棟で、いずれも昭和32（1957）年に国の重要文化財に指定されています。また、平成16（2004）年には、本丸の三階櫓と辰巳櫓が木造で復元され、多くの市民の方々に親しまれています。



新発田城の範囲と発掘調査地点

新発田城の瓦について

かわらぶ
瓦葺きの建物は、江戸時代以降に一般的となりますが、雪の多い地域では、城郭や寺院などに限られていたようです。新発田城では、本瓦葺きと呼ばれる丸瓦と平瓦を組み合わせた葺き方が採用されました。

明治5（1872）年頃の古写真では瓦葺きの櫓や門が写っていますが、絵図の表現などから、築城当初は多くの建物がこけら葺きであったと考えられます。その後、建物の修復や再建の際に、次第に瓦葺きに替わっていったことが古文書などから分かります。また、藩主の御殿や家臣の屋敷は、こけら葺き・かやぶき屋根であったことが、絵図や古写真から明らかとなっています。

新発田城から出土した瓦は、その表面の色から、黒瓦（素焼きの^{いぶ}燻し瓦）と赤瓦（鉄分を多く含んだ^{ゆうやく}釉薬のかかった瓦）の2種類に大きく分けられます。また、瓦の種類には、屋根の大部分を占める^{まる}丸瓦や^{ひら}平瓦のほかに、軒先を飾る^{のきまる}軒丸瓦・^{のきひら}軒平瓦、屋根の^{おに}両端などを飾る鬼瓦など様々です。



溝に捨てられた瓦（二ノ丸）

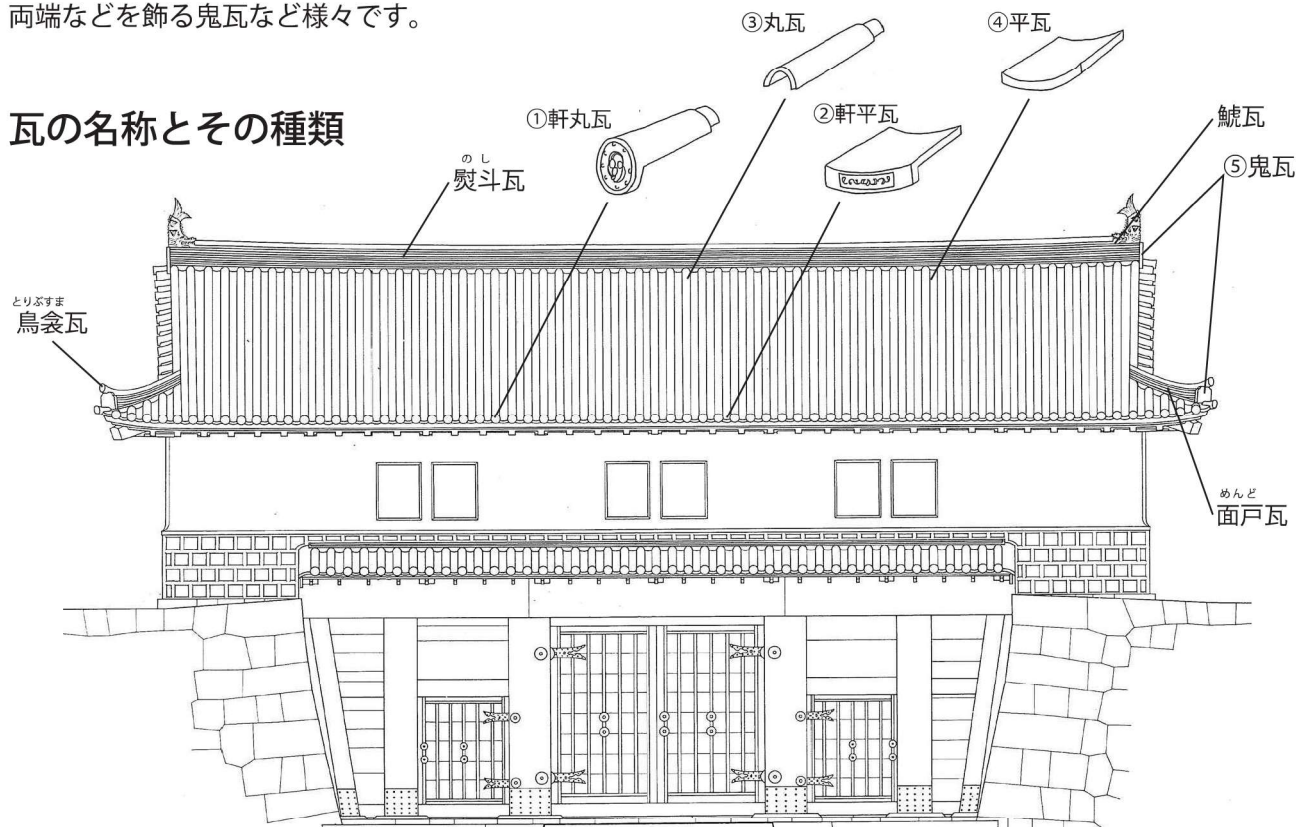


堀の斜面に捨てられた瓦（二ノ丸）

瓦の種類

（藤原勉・渡辺宏 1990『和瓦のはなし』鹿島出版会より）

瓦の名称とその種類



新発田城 表門正面図（重要文化財新発田城修理委員会 1960『重要文化財新発田城旧二の丸隅櫓表門修理工事報告書』より）

瓦の役割

①軒丸瓦（のきまるがわら）

屋根の軒先を飾る、丸瓦の先端に瓦当^{がとうめん}面（文様が施された部分）がついた瓦です。瓦当面の文様は、蓮の花や三巴^{みつどもえ}、藩主の家紋などが一般的です。

新発田城から出土したものには、「三巴文」と、三巴文の周りに珠文を施した「連珠三巴文^{れんじゆ}」の2種類の文様がありました。



軒丸瓦（左：三巴文、右：連珠三巴文）

②軒平瓦（のきひらがわら）

屋根の軒先を飾る、平瓦の先端に瓦当^{がとうめん}面がついた瓦です。瓦当面には、花や葉、蔓^{つる}といった植物の文様などを施しました。

新発田城から出土したものには、「橘文^{たちばな}」、花を表現した「8の字状文」、「三葉文」と考えられる文様、「菊文」の4種類の文様があります。



軒平瓦（左上：橘文、右上：8の字状文
左下：三葉文か、右下：菊文）

③丸瓦（まるがわら） ④平瓦（ひらがわら）

新発田城の屋根の大部分には、丸瓦と平瓦が交互に重ね合わせて葺かれています。丸瓦は、円筒を半分にした形で、凸形の面を上にして葺きます。また、半円筒の片方の端には、「玉縁^{たまぶち}」と呼ばれる段差がついています。平瓦は、緩くカーブした板状の瓦で、凹形の面を上にして葺きます。



丸瓦（左）・平瓦（右）

⑤鬼瓦（おにがわら）

屋根の両端などを飾る瓦です。一般的には鬼の顔の文様を施しますが、防火のために「水」の字を入れたもの、「福槌」や「宝珠」などの富を願った文様や、家紋などを用いることもあります。

新発田城から出土したものには、藩主・溝口氏の家紋である「五階菱」が施されていました。



鬼瓦（五階菱）

⑥線刻のある瓦

文字や絵画などを線で書いた瓦です。

新発田城からは、「寶曆九卯」（1759 年）、「瓦家」・「六丑九月日」（1769 年または 1853 年）と記された瓦が出土しました。その瓦が、実際に新発田城で使用されていた時期を知ることができる貴重な資料です。



線刻「寶曆九卯」（左：写真、右：拓本）

⑦刻印のある瓦

瓦には、刻印が押されたものもあります。

新発田城から出土したものには、「大坂瓦司中山市郎右衛門」や「養」（養の異字体か）、「苾持ち八弁花」といった刻印があります。これらは、瓦を作った職人やその工房を示していると考えられています。



刻印（左：「大坂瓦司中山市郎右衛門」、
中央：「養」、右：「苾持ち八弁花」）

⑧復元瓦

平成 14（2002）年から平成 16（2004）年にかけて、発掘調査による結果などから得られた情報をもとに、三階櫓・辰巳櫓が伝統的な工法を用いて木造復元されました。その際には、明治 5（1872）年頃に撮影された古写真に写る櫓の姿が重要な手がかりとなっています。

復元に使用された瓦は、実際に新発田城から出土したものをもとに製作され、軒丸瓦には「連珠三巴文」、軒平瓦には「橘文」が施されました。櫓の屋根根には、丸瓦や平瓦をはじめとする大量の瓦が使用され、三階櫓・辰巳櫓を合わせると、総使用枚数は約 28,500 枚、重さにすると約 84 トンもあります。これらの中には、1,000 名以上の市民の方々の手により、署名された瓦も含まれています。また、それぞれの櫓には、発掘調査により出土した瓦も 1 枚ずつ使用されており、辰巳櫓 2 階の東側の窓から見るができます。



復元瓦（左：軒丸瓦、右：軒平瓦）

令和 6 年度 新発田市遺跡出土品展

新発田城の瓦 ― 出土品と復元瓦 ―

編集・発行：新発田市教育委員会 文化行政課

発行日：令和 7 年 2 月 2 1 日